

小説部門 課題作品

「涙売り」

小川洋子

『夜明けの縁をさ迷う人々』より

私は十八の歳まで、涙を売って暮らしを立てていました。お得意様には音楽大学バイオリン科の先生や、サーカス楽団のクラリネット奏者や、フラメンコ喫茶のギタリストなどがいました。皆様私の涙をたいそう気に入って下さいました。大事な演奏会の前にはもちろん、練習の合間にも何かあるとすぐにお声が掛かり、私が飛んで行って涙をお売りしますと、「ああ、助かった。やっぱりこれがないと、どうにも仕様がなくてね」などとおっしゃるのでした。

スタジオ、コンサートホール、街角の広場、楽器店、自宅、別荘、愛人宅……とにかく指定された場所へ、真夜中でもすぐに駆け付ける、というのが私の身上でした。三百六十五日、休みはありません。なぜなら、楽器はいつ調子が狂うか分からないからです。もちろん天候に左右されますし、会場のライトの加減や観客の熱気、そして何より演奏者の体調により、楽器はたちまち音色を変えてしまいます。そんな時、私が呼ばれるのです。

中には本来の涙の役割を超えたものを、求めるお客様もいらつしやいました。つまり私を、お守りのように思っただけです。その方（偉大なチェリストでした）にとって必要なのは涙よりも、私がそこにいるという事実でした。

「私は、ここにおります」

そうやって私は、舞台の袖でチェリストの背中に掌てのひらをあてがいます。すると彼はみるみる緊張から解放され、安らかな微笑を浮かべ、スポットライトの中へ歩み出て行くのでした。

その方はたとえ涙をお買いにならない時でも、ただ舞台袖に立っただけの私に、涙分以上

のお金を支払って下さいました。彼のチェロは素晴らしく、いつも私は、感動の涙を抑えきれなかったのですけれど。

ただし私はプロの演奏家だけを相手にしていたわけではありません。また、自分の涙をただの商売道具と割り切っていたわけでもありません。例えば、校庭の片隅でリコーダーの練習に悪戦苦闘している小学生と出会った時、あるいは粗大ゴミの集積場に打ち捨てられた足踏みオルガンを見つけた時、そっと近寄って、涙を振り掛けてやりました。たとえお金がもらえない場合でも、自分が役に立つと思った時には、惜しみなく涙を差し出したのです。

いつの頃からか定かではないのですが、私は自分の涙が楽器のためにある役割を果たすと気づいていました。私の涙をすり込むと、どんな楽器でもとたんに音色がよくなるのです。塗料のはげた木琴でも、錆付いたトライアングルでも、深い洞窟の底から届いてくるような音を響かせはじめます。壊れたオルゴールの上に涙を落としただけで、ぜんまいが再び動きだしたこともあります。

原因は分かりません。一度どこかの研究所の科学者が、涙の成分を分析させてほしいとやって来ましたが、お断りしました。そんなことをして何の役に立つのでしょうか。私の涙は私だけのものです、それをどういうふうに使おうと、他人に指図される筋合いはありません。怪しげな薬品や検査器具の並ぶ実験室で、見ず知らずの人たちに見つめられながら、涙を採取されるなど、考えただけでもぞつとします。

最初は、近所に住む楽器商の老人に、まとめて涙を売るだけでした。ところが少しづつ噂が広まり、直接、継続的に涙を供給してほしいと望むお客様が現れはじめ、楽器商を通さず私個人が対応するスタイルになってゆきました。私の知らないところで、彼はかなりあくどい商売をしていたようなのです。取り引き中止を言い渡した私に、彼はたいそう腹を立て、嫌がらせをするようになりました。郵便受けに腐った鶏の臓物を入れたり、ドアノブに半死半生のカラスをぶら下げたり、窓にナマコをぶつけたり、そんなことです。私を泣かせて、涙を横取りするつもりだったのでしょうか。やがて私の家は悪臭に満ち、町内会からも苦情が出て、そこに住み続けるのは難しくなってきました。

思いきって私は放浪の旅に出ることにしました。どこに引越しても突き止めて、またいくらでも臭いものをお見舞いしてやる、と毒づく楽器商から逃れるためには、そうするより他に方法がありませんでした。私にとって必要なのは涙腺るいせんと涙囊るいのうだけです。難しいことじゃありません。こうして私は放浪の涙売りになったのです。

名器と呼ばれるある種のバイオリンには、塗料に人間の血が混じっている、と聞いたことがあります。やはりいつの時代にも、知らず知らず楽器と心を通わせるような人間が存在したのかも知れません。努力などしなくても、生まれながらに動物の心が読めたり、樹木の声が聞こえたりする人がいるのと同じなのでしょう。ただ血液は一度塗り込めば蒸発することがなく、月日とともに深く木目に染み入ってゆきませんが、涙は違います。残念ながら涙が楽器に留まっていられる時間は、そう長くありません。それは音色と一緒に、いともたやすく空気の隙間に吸い取られて

ゆきます。

ですから私は、楽器が求める限り、生涯涙を流し続けなければならないのです。

そんなふうには涙を売っていた頃の宝物は、今でも大事なお菓子の缶にしまって薄桃色のリボンを結んであります。演奏旅行先から送られてきた絵葉書、私だけのために録音されたカセットテープ、お誕生日にプレゼントされた楽譜、切れた弦、コンサートのプログラム、写真、ハンカチ、などです。絵葉書には、私など決して訪れる機会はないだろう、はるかな町の風景が描かれています。楽譜の隅には愛を告白する詩が記され、ハンカチには私のインシヤルが縫い込まれています。

しかし今では缶のリボンが解ほどかれることはありません。私の涙を求めて下さった方々との思い出は、遠くへ過ぎ去りました。おそらく缶の中で、プログラムは虫に食われ、カセットテープは伸びきって、かつての美しいメロデーはただの耳障りな雑音になってしまっていることでしょう。

私をお守りのように大事にして下さったあのチェリストも、とうの昔に亡くなりました。たった一人練習室で、チェロを抱えたまま息絶えていたそうです。その姿はまるで、愛するチェロにお別れのキスをしているかのようにだったと、風の噂で聞きました。そのチェロに私の涙のかけらがほんのわずかでも残っていてくれたら、と願わずにはいられません。

そうした生活に終止符を打ったのは、恥ずかしくなるくらい単純な理由からでした。単純すぎて、どう言葉で表現していいのか迷うほどです。つまり私は、恋をしたのです。

もうすぐ十九の誕生日を迎えるというある日、私は一人の男と出会いました。お得意様である、サーカス楽団のクラリネット奏者に涙を届けた帰りのことでした。サーカスがテントを張っている運動公園の広場から、鉄道の駅へ続く道を一人で歩いていましたと、どこからか不思議な音楽が聞こえてきます。不思議、としか言いようのない、生まれて初めて耳にする種類の音楽です。多少楽器については詳しいつもりでいた私は、一体どんな種類のものを使っているのか興味をそそられ、音のする方向へついふらふらと吸い寄せられていきました。

ほどなくポプラの木の下に陣取った、男女混合の五人ほどの楽団を発見しました。しかし最初のうち、本当にこの音楽を奏でているのが彼らなのか確信が持てませんでした。音楽はラジオから流れていて、彼らは単に踊っているだけではないか、と疑いを持ちました。なぜなら彼らは皆半裸で、また誰一人として、楽器を手にしていなかったからです。

彼らは人体楽団でした。一切の道具を使わず、自らの身体のみを使い、音を奏でる人々です。真ん中に立っている人が口笛を吹いています。それがメロディー担当です。右隣の人はTバック姿で尻しりを叩たたき、左隣の人は掌で耳の穴を塞ふさいだり開けたりし、また別の人は腰まで伸びた髪を爪弾つまびく。そういう状況です。

そして彼は、輪の外れで、他のメンバーとは更に変わった動きを見せていました。いくら奇妙でも、他の人たちは身体はどこをどう使って音を出しているか、おおよそ見当がつきませんが、彼

だけはどんなに注意深く耳を澄ませても、その肝心な点が不明でした。彼はただ単に、身体中の関節をくねくねさせているだけだったのです。

集まっている観客はほんのわずかでした。皆サーカスの方に行ってしまったのでしよう。本来の楽器に比べれば、彼らが発する音量は圧倒的に小さく、正直なところ派手さには欠けています。足を止める人たちも、怪訝けげんそうな表情で遠巻きに眺めるだけで、音楽に聴き入っていると云える人は誰もいません。

映画音楽か外国の子守唄こもりうただと思われる曲が、終わりを迎えました。かろうじてパラパラと拍手が起こりましたが、楽団のうら寂しさをより際立たせるに過ぎない拍手でした。五人の誰かが脱いだらしいキャップの中に、数枚のコインが見え隠れしていましたので、彼らがプロであることに間違いはありません。しかし新たなコインが投げ込まれる気配はどこにもありませんでした。一言の説明もなく、何の合図もなく、次の曲がスタートしました。

風の音に邪魔されて何の曲か分かるまでしばらく時間が掛かりました。ジャズのスタンダードでした。あれほど謙虚なジャズを聴いたのは生まれて初めてでした。

私は関節踊りの男がどんな音を発しているのか、何のパート担当なのか、どうしても気になつて仕方なく、神経を集中させました。楽器の専門家である自分の耳で聴き取れない、ということが悔しかったのです。

男は髪を振り乱し、汗を飛び散らせながら、「演奏」に没頭しています。足首から膝ひざ、腰、両手、首、あらゆる関節を複雑に動かし続けます。裸の上半身に、ポプラの葉の影が映り、揺らめ

いています。まるで影に愛撫あいぶされ、身をよじっているかのようです。

やがてようやく私の耳は、メロディーの底をひっそりと流れる、彼の音をキャッチしました。関節きせきを軋きしませて、リズムを取っていたのです。彼は関節カスタネットでした。

その時不意に、ひどく乱暴な様子で、一人の男が楽団の輪に割り込んできました。

「駄目、駄目。こんなところで勝手なことされちゃあ、困るんだよ。さっさとどっか行って」

男はサーカスの団員のようでした。自分たちの公演の邪魔をしているとでも思ったのでしょうか。下品な言葉で彼らを罵ののしり、そのうえ関節カスタネットの胸を突いたのです。何の抵抗もできないまま、関節カスタネットは尻餅しりもちをつきました。とっさに私は走り寄り、彼を助け起こし、サーカス団員に抗議しました。楽器が粗末に扱われるのを見て、黙ってはいられません。

「乱暴はよして下さい。彼らがどんな迷惑を掛けたっていうんですか。何にも悪いことなどしていません。ただ音楽を奏でただけです。しかも静かすぎるくらい静かな音楽を」

楽団員たちは皆、サーカス団員の乱暴よりも、私の闖入ちんにゅうの方に驚きを隠せない様子で、立ち尽くしていました。

「いいんです。ありがとう。どうか僕たちには構わずに……」

関節カスタネットの声は、カスタネットの音色と同じくらい密ひそやかでした。これが、私と彼の出会いです。

以来私は人体楽団に加わって、彼らと一緒に行動するようになりました。もちろん私の身体はどの部分も楽器としての用をなしませんから、表舞台には立ちません。裏方です。涙で彼らを調

律するのです。

もう演奏家たちに涙を売るのは止めました。いくら私でも際限なく涙が出てくるわけではなく、限りがあるのですから、仕方ありません。もはやお得意様たちにお売りする余分な涙はなく、すべてが人体楽団に（正直な心情から言えば関節カスターネットに）、捧げられます。かつて腐った臓物を使ってでも手に入れたいと画策された涙を、関節カスターネットのためだけに流すのです。彼らは公演の場所を求めてあちこち旅をしますので、私の生活様式に変わりはありません。放浪の涙売りが、人体楽団専属になっただけの話です。

「涙って、こんなに温かいものだったんだね。知らなかった」と、関節カスターネットは言いました。

「そうよ。あふれたたての涙は体温より高いの。身体の奥の方から滲み出してくるから」
「ああ、本当に温かいよ」

彼はうっとり目を閉じました。私は横たわる彼の上に覆いかぶさり、全身の関節の上に涙を落とし、それを丹念にすり込んでゆきます。瞬きをすればいくらでも、涙があふれてきます。心行くまで彼に触れていられる喜びの涙です。

「今までに売った涙は全部、冷たくなってたわ。あなただけにしか、フレッシュな涙は差し出せないの。分かるでしょう？」

返事はありません。涙の感触に溺れて、私の声など聞こえないのです。関節の音を外へ響かせるのに、余

計な筋肉は邪魔なのかもしれません。皮膚に手を当てた瞬間、こちらに伝わってくるのは骨の感触です。そこには皮膚も血管も脂肪もなく、まるで直接骨を握っているかのような生々しさがあります。

そしてなるほど関節は、実に豊かな表情を持っています。まず何より動きが複雑で、尚かつしなやかで、各々独立した意思を持っているのかと錯覚するほどです。演奏している彼の姿を目の前にすれば、関節の中で細かい骨の凹凸が、どんなふうにも組み合わさって一続きの動きを生み出しているか、透けて見えそうな気さえします。

彼は身体中すべての関節から、すべて異なった音を発することができます。大腿骨だいたいこつの関節からは地響きのような音、小指の第一関節からは小鳥のため息のような音、という具合です。それらを休みなく、自由自在に組み合わせるので。

「痛くないの？」

心配になって私は尋ねてみたことがあります。

「平気だよ」

事もなげに関節カスタネットは答えました。

「僕は他の人より関節を強くこすり合わせているわけじゃない。ただその軋みをリンパ液の振動に変えて伝えているだけなんだ」

私は彼の体内でリンパ液が震えている様を思い浮かべてみました。それはかつて出会ったどんな楽器が鳴っている様よりも奥ゆかしく、また、なまめかしいものでした。

一体、関節カスターネットほど引つ込み思案な楽器が他にあるでしょうか。バイオリンやピアノが技巧を凝らして弦をこすり、鍵盤けんぱんを叩き、これでもか、と華麗な音をまき散らしているのに比べ、関節カスターネットは身体の奥にひっそりと隠れたまま姿さえ見せず、ほんのわずか、そう、涙が溜たまったほどのわずかなリンパ液にさざ波を起こしているだけなのです。このいとおしい楽器にこそ、私の涙は相応ふさわしいのです。

彼の関節は砂地のように涙を吸い込んでゆきます。それが小さな隙間にまで行き渡り、骨をより滑らかにし、リンパ液の透明度を高めてゆくのが分かります。私は自分の立場を忘れ、つい彼の関節にキスをしたくてたまらなくなり、その気持ちを抑えるのに苦心します。唇についたお昼のパンくずや、めくれた薄皮や、まして唾液だえきなどが付いてしまったら、せっかくの涙が台無しです。だから私は、どうかして我慢するのです。

調律が終わると、彼は黙ったまま、私だけのために関節を鳴らしてくれます。しかも私が最も愛している左足のくるぶしの関節です。私は彼の左足を抱き、くるぶしに耳を寄せます。すると洞窟どうくつの果てにある泉に、一滴涙がこぼれ落ちるような音が、鼓膜に届いてきます。それは私が、慎み深くよく我慢したことへのご褒美です。

人体楽団の演奏場所は限られていて、きちんとしたホールに出演できることはまれです。デパートの屋上か公民館がせいぜいで、たいていは最初に私が出会った時のような青空パフォーマン
スです。

公園や広場の木陰で私たちは準備をします。洋服を脱ぎ、柔軟体操をし、曲順を確認し、そして調律をします。関節カスタネットの調律は既に私が終わっていますから、あとは残りのメンバー、口笛、耳笛、髪琴、尻しりドラムの四人です。彼らはお互い協力して、ガラス瓶に溜しりまった、既に冷たくなった涙を塗り合います。

私はガラス瓶を提供するだけで手出しをしません。少し離れたベンチで、じっと彼らを見守るだけです。人体楽器については経験が乏しいから、と言いついてはありますが、本当は関節カスタネット以外には触れたくないからです。なのに心優しい関節カスタネットは、皆の手助けをしてくれます。耳笛の、外耳道の入口を押し開いたり、尻ドラムのために鏡を支えたり、髪琴のうなじの後れ毛を櫛くしですいたりするのです。

でも何より私が一番許せないのは、口笛の唇に、人差し指で涙を塗り込んでやることです。どうして彼が口笛女にそれほど親切にしてあげなければならないのでしょうか。唇なら、彼女本人だって十分手が届くではありませんか。メロディー担当でちよつと目立つからといって、いい気になっっているのでしょうか。しかも塗られているのは、私の涙です。関節カスタネットのリンパ液と、口笛の唇の皸しわに、同じ私の涙がしみ込んでいるのかと思うと、胸がざわざわし、息苦しくなりません。

私は彼らから離れ、茂みの陰に隠れます。泣くためです。涙を流している時が、私は一番落ち着くのです。

ポケットから専用のガラス瓶を取り出します。知り合いのガラス屋に頼んで誂あつらえた特別製の筒

状瓶で、U字形をしています。両方の口にゴム栓で蓋ふたができるようになっていて、その幅はちょうど私の両目の間隔に合わせて作られています。ですから私はそのガラス瓶を両目の下にあてがうだけで、漏らさず涙を集めることができますのです。

ただし、涙に対し常に高い質を求める私は、立ったままの採取をよしとしません。下睫毛したまつげや目の縁に触れた涙に、不純物が混じるのが我慢できないのです。そこで私は四よつん這はいになります。四つん這いになって、垂直に落下する涙をガラス瓶で受け止めます。

向こうから人体楽団の音合わせが聞こえてきます。私は関節カスターネットと口笛が力を合わせ、自らの身体から発せられた音を調和、融合させている様子を思い浮かべ、泣きました。一滴、一滴と、涙はU字形ガラス瓶の底に溜まってゆきます。きつと、具合が悪くて嘔吐おうとしているのかと誤解されたのでしょうか。見ず知らずの誰かが、「大丈夫ですか？」と声を掛けてくれました。

「ええ、大丈夫なんです。私のことなど放っておいて下さい。それよりあっちの、人体楽団の演奏を聴いて下さい」

と、泣きながら私は言いました。

うぬぼれではなく、私が入団してから人体楽団の音楽レベルは格段に上がりました。音に厚みが増し、リズムにめりはりが出て、情感が豊かになりました。楽団員たちの表情は自然に潑刺はっさつとし、雰囲気は明るくなり、集まってくる観客の数も、コインの数も増えてきたようです。

口笛女はまるでそうした変化が全部自分の手柄であるかのように、首をスイングさせながら、

自信満々で口笛を吹いています。尻ドラムは光を浴びてつやつやと光り、髪琴は思わずミツバチが寄ってくるほど魅力的なビブラートを響かせ、耳笛の耳たぶは薔薇色ばらに染まっています。けれどももちろん私にはよく分かっています。楽団の音楽が素晴らしくなったのは関節カ斯塔ネットのおかげです。関節カ斯塔ネットに丁寧にすり込まれた涙のおかげです。

しかし私はまだまだ満足していません。同じ涙でも、種類によって質が変わってくるのです。うれし涙、悲しい涙、感動の涙、悔し涙……。涙には実にさまざまな種類があります。涙売りをはじめた最初の頃は、どんな涙でも全部一緒にしてガラス瓶に集めるだけでしたが、次第にどんな状況で流した涙かによって、色合いも濃度も手触りも違っていることに気づきました。当然、楽器に対する効用にも差が出てきます。

一番粗悪なのは、玉ねぎを切って流す涙です。未熟な涙売りだった私は、必要に迫られ、しばしばこの方法を用いました。いくら涙を流すのが仕事とはいえ、急に今日午後の演奏会までに十五cc、などという注文を受け、都合よく用意が調うわけではありません。ですから私はいつも玉ねぎを数個、腰にぶら下げていたのです。

けれど玉ねぎの涙は、プロとして差し出せる最低ラインの品質と言わざるを得ません。それは体の深部、心の中心点から湧き出すのではなく、目の表面から条件反射のようにあふれてくるに過ぎません。そのうえ玉ねぎの汁が混じっています。

では、最も高品質な涙は何か。それは、痛みから生まれる涙です。薬も役に立たない、のた打ち回るような、身体を突き抜ける痛み。できることなら二度と思ひ出したくない痛み。その時流

れる涙ほど、純粹なものはありません。悲しみや悔しさの涙には、どうしても心の濁りが表れ出てしまいます。しかし痛みおびやの涙の源泉は肉体そのものです。肉体そのものが脅かされる、という犠牲の上に流れる涙です。そこには計算も嫉妬しつとも甘えもありません。払う犠牲が大きいほど、楽器は喜ぶのです。

残念ですが、私はまだほんの数回しか痛みおびやの涙を流したことがなく、しかも歯痛だとか偏頭痛だとか、その程度のレベルでした。にもかかわらずその時の涙が果たした役割は、目を見張るものがありました。そう、かの偉大なチェリストが、ご臨席なされた女王様から勲章を授かったという、生涯で最良のソロ・コンサートの折、調弦に使ったのが痛みおびやの涙でした。

関節カ斯塔ネットのために、私は痛みおびやの涙を採取したいと願いました。口笛女をはじめとする他のメンバーには、普段どおりの涙で構わないでしょう。彼女らはそれで満足しているのですから。何なら玉ねぎを使ってもいいくらいです。

でも関節カ斯塔ネットは特別です。彼の奏でる音はあんなにも遠慮深いのですから、私が手助けしてあげなければ、誰があおびやの身体の奥に、澄んだリンパ液の泉があるなどと気がついてくれるでしょう。口笛女は、関節カ斯塔ネットに粗悪な涙を塗られ、有頂天になって唇をすぼめているに過ぎない女ではありませんか。

最上級の痛みおびやの涙を流すため、私はどんな犠牲でも払う決心をしました。涙腺るいせんと涙囊るいのうだけを携えて放浪している私に、払うことの許された犠牲を、すべて払う決心です。

最初に私は、左足の小指を切り落とすことにしました。左足の小指がなくても、涙を関節カスターネットにすり込むことは十分できるからです。調律を待って横になっている関節カスターネットの脇で、私は包丁を振り上げ、小指めがけて打ち下ろしました。うめき声を彼に聞かせないため、とっさに両手で口を覆いました。声を押し殺した分、幸いにも余計にたくさん涙が出てきたようです。私は血で彼を汚さないよう注意しながら、涙を関節の上で落としました。

次は右足の小指、その次は左足の薬指、と順調に切断は続いてゆきます。やはり、痛みは涙はほればれするくらいに素晴らしさです。あまりの痛さに髪は逆立ち、息さえできず、吐き気を催しながらも尚、濡れた瞳ひとみに思わず微笑が浮かぶほどです。調律の最後にいつも彼がご褒美にと聞かせてくれる、くるぶしの音は、どこまでもいとおしさを増してゆきます。キスをしたい欲望を抑えるのが、日に日に難しくなっています。

足の指が全部なくなったあと、私は次に唇を選びました。唇さえなければ、キスの欲望もわきません。口笛女の唇に嫉妬することもありません。

ふくらはぎ、耳たぶ、乳首、舌。犠牲にできるものが私にはいくらでもある。そう思うと幸せでした。卵巣、声帯、頬、尿道。あらゆるものが失われてゆきました。思わず喜びの涙があふれそうになり、懸命にこらえました。私は痛みの涙だけを、関節カスターネットのために流し続けました。

いつしかすべてが失われ、私には涙腺と涙嚢だけが残されることになるでしょう。それだけあれば他には何も必要ありません。なぜなら私は放浪の涙売りなのですから。